

序

『立命館アジア・日本研究学術年報』第3号をお届けします。

本誌が創刊されたのは、2020年6月でした。グローバルな国際発信を使命の柱の1つとする立命館大学アジア・日本研究所が、自らが刊行する学術誌の第3弾として和文誌を創刊したのは、「グローバルな発信」というものが外国だけではなく、自らの社会も含むという認識に立ってのことでした。特に、日本語は母語としての話者人口では、世界のトップ10に入るほどですから、自らの言語圏でアジア・日本研究の重要性に賛同いただくことは、研究のグローバル化を推進する以上、不可欠の前提となります。

さいわい、本『学術年報』の意義を広くご理解いただくことができ、創刊号、第2号ともに、多くの皆さまから温かく迎え入れていただくことができました。ここに第3号を無事にお届けできたことは、編集委員会として嬉しい限りであり、これまでご支援いただいた皆さまに対して感謝の念に堪えません。厚く御礼申し上げます。

その一方で、本誌が創刊されたときは、すでに世界中が「コロナ禍」の中にあり、日本でも感染防止のための措置がさまざまな生活上の困難を生み出していました。パンデミックは濃淡の差が多少はありつつも人類の全体に広がり、そしてそれぞれの社会の中でいかなる例外もなく影響を及ぼすため、私たちはみな、さまざまな困難に直面しつつ、自分たちのすべきことをするために苦心を重ねてきました。教育や研究の面も、例外ではありません。

研究の諸分野の中でも、アジア・日本研究は、日本を含みつつその外に広がるアジアとの交流を前提としている分野であるため、コロナ禍によって国際的な交通が停止ないしは極度の制限を受けたため、これまでにない困難に直面してきました。

立命館大学では、その状況に積極的に対応するために2020年度には「With コロナ社会 提案公募研究プログラム -Visionaries for the New Normal-2020」、2021年度には「Post コロナ社会 提案公募研究プログラム -Visionaries for the New Normal」によって、コロナ状況の中でのブレークスルーをめざす提案を公募しました。アジア・日本研究所でも2020年度には「With コロナ時代のアジア研究を先導する《拡張現実》の活用と情報可視化の手法開発」、2021年度には「アジアにおけるパンデミック対応の多様性：Post コロナ時代の社会観・倫理観の比較研究」を提案して採用され、DX（デジタルトランスフォーメーション）を積極的に活用することで活路を拓こうと共同研究を実施してきました。現在も、「研究のDX」を推進し、サイバー空間上のデータをいかに利用してアジア研究、地域研究を展開するかを検討し、実施しています。

しかし、すでに一人前になっている研究者の場合、これまでの研究蓄積をベースとしてデジタル化によって拓く新分野を足すことで研究を展開することが可能であるのに対して、まだ研究の道を歩み出したばかりの大学院生の場合には、現地のフィールドワークができないため、研究の基礎がなかなか築けないという問題が次第に浮かび上がってきました。さまざまな分野にわたる学際的な

アジア・日本研究の中でも、フィールドワークを第一義とする分野では、これまでにない困難が続いています。最近、多少の感染リスクがあっても、十分な予防措置を取りつつフィールドにでかける研究者も増えてきました。コロナ禍がどこで終息するのか、あるいは「ウイズコロナ」が常態となる中で、社会生活も研究や教育をやらざるをえないのか不明な中での手探りと私たち皆の尽力が続きます。

その一方で、研究のDXを推進しながら、コロナ禍の合間を縫って対面式のフィールド調査にかけるとか、教育の現場でも、授業や学生との交流がオンライン一辺倒になったり、対面授業が復活したり、さらにハイブリッドでオンサイト（対面）とデジタルによるオンラインを合わせて用いるというような生活をしている中で、あらためて気がついたことがあります。それは、デジタル化は、デジタル化によって代替しえない人間生活のアナログ面を痛感させるということです。さらに言えば、デジタル化の推進とは、「デジタルとアナログのベストミックス」を探究することにほかならないということかと思えます。しかも、人間生活における「アナログ」とは何かということは、これまでほとんどがアナログの時代では自明すぎて論議の対象にもならなかったと、痛感しています。研究における「アナログ性」も、デジタル化が進むからこそ、あらためて問われるべき問題なのです。

私たちのアジア・日本研究でも、アジアとのアナログ／デジタルな交流をいっそう重ねつつ、この問題を考えていきたいと思えます。もちろん、そうしたことをしっかり考えながら、研究に役に立つDXを徹底して追求していくことは、言うまでもありません。

本誌は、英語版の *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* と同様に、オンライン版（デジタル版）と、従来型のプリント版（アナログ版）で発行を続けます。掲載する内容は、研究論文、総説論文、研究ノート、研究動向報告、研究報告とフィールドワーク報告、書評のいずれでも「学際性」「文理融合」を重視して、人文・社会科学系、自然科学系のいずれの分野にも対応しております。アジアや日本に関わりのある研究であれば、どの分野の投稿でも歓迎いたします。是非、ご投稿ください。

今後とも、本誌を含めて、世界における「アジア・日本研究」の諸活動にいっそうのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いする次第です。

2022年10月

小杉 泰

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 副機構長
アジア・日本研究所長、編集委員長